



TITLE:

館長在任3年間を顧みて

AUTHOR(S):

朝尾, 直弘

CITATION:

朝尾, 直弘. 館長在任3年間を顧みて. 静脩 1995, 31(4): 1-2

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37294>

RIGHT:



静脩

1995年 3 月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 31, No. 4

館長在任 3 年間を顧みて

附属図書館長

朝 尾 直 弘

3 年前、はからずも附属図書館長に任命されてから、いつのまにか任期が満ち、あわせて退官の日をむかえようとしている。就任早々は、自分自身を館長サナギと思い、いつかは立派な館長(蝶?)になれるつもりでいたが、はたして思いどおり羽化できたかどうか、すこぶるところもとない。

あたえられた機会に、在任中印象に残ったことからのいくつかについて触れてみよう。

(1) 図書館予算のこと

私は、附属図書館長に選出されるまでは、商議員でもあったことから、附属図書館の財政面の困難な状況は聞き及んでいたものの、これほど窮屈であるとは正直なところ想像もしていなかった。いろいろ予算の割り当てはあるが、ほとんどがいわゆるヒモつきで用途が指定されており、大学の個性を生かした図書購入ができない。購入費に限られ、単価が上昇するなかで、学生用図書の選定委員会も、その活動はほとんど有名無実に近い状態におかれてきた。このままでは蔵書の体系に大きな欠落を生じ、将来に禍根を残すことになる。

さいわい、最近になって、井村総長をはじめ、各部長および事務局等の理解を得て、部局長会議の席で附属図書館の予算を中心に、懸案事項を含め、こまかい数字をあげ、実状を申し述べる機会を与えていただいた。その結果、今年度の配分として、学生用図書購入費と CD-ROM サーバースystem が別途予算化されたことは、まことに有り難く、感謝に堪えないところである。

しかし、現在の図書館予算の枠組みが決められて

から12年経っており、運営費は当初の2倍以上にふえている。これは図書館をめぐる状況の変化に対応した面もかなりある。情報メディア変革の急速な進展にともなう、さまざまな新しいサービス業務が図書館に負わされており、その課題をはたすためには、恒常的な手当が必要である。現在進行中の各部局の改編問題ともからんで、大学全体として抜本的に検討し改善すべき点は多い。

附属図書館では、昨秋以来、将来構想検討委員会を設置して、京都大学における図書館の近未来のヴィジョンをさぐり、このほど中間まとめを商議会に提出、本格的な検討に入ることになった。そのなかには、土日開館などサービスの質の向上から組織の見直しまで、多様なテーマがあがっている。学内諸賢のご支持のもとで、よき成果の得られることを期待している。

(2) 今昔物語集のこと

今昔物語集(鈴鹿本)九巻は、鎌倉時代に筆写されたものと考えられており、数ある写本のなかでも現存諸本の祖本とみなされている。虫害による傷みはなはだしいため、閲読を厳しく制限されていた。「幻の写本」とよばれたのはそのせいであった。私自身、館長になって、はじめてまのあたりに観ることができ、日本史を専攻するものとして、たいそう興味をそぞられた。

もと図書館におられた鈴鹿三七氏の縁で、氏の遺志と子息紀氏のご厚意により京都大学に寄贈いただき、文化庁の指導の下に3年の歳月をかけ補修を完成した。その過程で、綴じ紐にもちいられていた紙

繕りを科学的分析にかけたところ、これについてはほぼ鎌倉時代のものであることが判明した。

今回の補修により、これから数百年間は補修する必要はないとも聞いている。このような貴重な資料は、人類の文化遺産であり、多くの人々の長期にわたる手厚い保護によって伝えられてきたものであり、図書館はさらに後世のためにこれを保存し、伝承する責任がある。目下、写真製版による複製本を刊行し、内外の研究者の便宜をはかる計画をすすめている。図書館のこうした活動は、これからもいっそう広げ、強められなければならない分野である。

現在、鈴鹿本は国の重要文化財の指定をうけるため、東京にはこばれている。私事ながら、京大最後の年に文化財保護審議会の専門委員として、このことにかかわることができたのはふしぎの縁というほかに、ひそかに喜びとしている。

(3) 日米ワンデイセミナーのこと

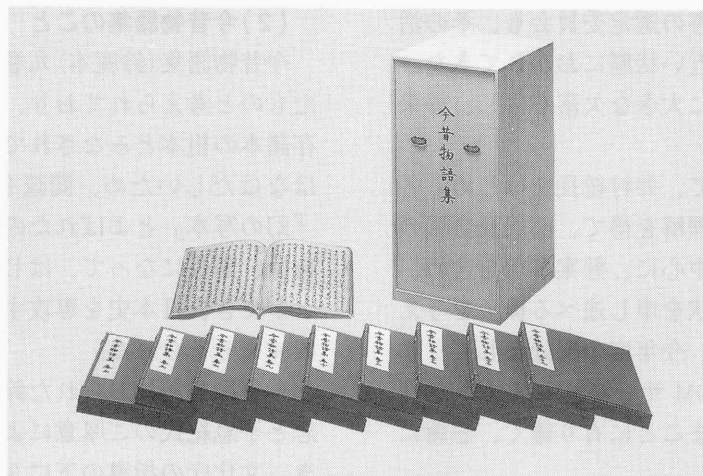
3年前、私は学部長の任期満了をひかえ、向う3年間の詳細な研究計画を立てていたので、館長選出は晴天の霹靂のごとく、ほとんどなすすべもない状態であった。その私に、図書館もおもしろいところだと思わせるようにしてくれたのが、就任早々にぶつかった日米大学図書館会議であり、京都で行われた日米ワンデイセミナーであった。前者がメンバー限定の正式会議であったのに対し、後者は自由参加のオープンセミナーで、京大が中心になって運営を担当した。

セミナーには、日米およそ400人が一堂に会し、過渡期に置かれた大学図書館の現状と当面する課題について、熱心な討議をくりひろげた。エレクトロニック・キャンパス、学術情報の国際流通、資料の保存、図書館サービスと著作権、というテーマをみ

れば、その今日性がわかるだろう。図書館員の職業人としての仕事に対する熱意と、研鑽に対するひたむきな意欲を感じとることができたのも収穫であった。私個人にとっては、館長学入門といった性格をもち、かつてアメリカ滞在中に漠然と感じていた大学図書館のあるべき姿に、理論的なすじをとおすことができたように思った。その後、毎年秋の大学図書館職員の研修会で「保存と伝達の二本柱の活動」、および「職業人としての親切なサービス」について、手をかえ品をかえ話すことになる。

学術情報伝達の将来像についての自分なりのイメージをもつことができたのも、このセミナーが機縁となっている。研究者に新しくて鮮度の高い情報をいかに早く伝えるか、分野によってこれが焦眉の課題であるところが多く、これまで主として追求されてきた領域である。それはさらに拡大されなければならない。とともに、古典のテキストのような、人類の普遍的知識となった古い情報が、古いからこそ価値をもち、いつでもだれにでも提供できるように、これからは考えていかなければならないだろう。バランスのとれた学術の創造的発展のためには、それは欠くことができない。この領域はすでに実行段階に入ろうとしている。

いま、図書館は遠い未来はみえはじめたが、現状からそこへ到達するための、近い未来の道筋を探っているところである。すでに述べたように、全学的な支援を必要とする点も多い。この方面にすぐれた見識をお持ちの新館長のもと、京都大学の図書館が飛躍の一步を踏みだせるよう、各位のご協力をかさねてお願いしておきたい。



鈴鹿本「今昔物語集」(題簽及び収納箱の揮毫は朝尾館長)